

■九州朝日放送番組審議会議事概要（1月分）

第579回	九州朝日放送番組審議会 議事概要
開催年月日	平成28年1月12日（火） 午後4時00分～5時30分
開催場所	九州朝日放送 本社役員会議室
出席者	<p>委員総数 8名  出席委員数 7名  欠席委員数 1名（レポート代読）</p> <p><b>（出席委員）</b>  光富 彰委員長、三好京子委員  藤田ひろみ委員、古宮洋二委員  松村茂雄委員、鶴 利絵委員  野田幸之輔委員</p> <p><b>（放送事業者側出席者名）</b>  代表取締役社長 武内健二  常務取締役編成制作局長 半田俊彦  取締役ラジオ局長 清水透  ラジオ編成業務部長 木附ゆかり  番組プロデューサー（KBCメディア） 平野繭子  視聴者・広報室長兼番組審事務局長 久芳康治  事務局員 都合信司、松田泰久</p>
議 題	<ol style="list-style-type: none"> <li>ラジオ番組  KBCラジオ戦後70年特別番組「貴方への恋文」  &lt;放送日&gt;平成27年8月15日(土)12時～12時30分</li> <li>放送基準第149条改正について諮問・答申</li> <li>平成28年1・2月ラジオ・テレビ番組編成状況の報告</li> <li>平成27年11・12月視聴者・聴取者応答状況の報告</li> <li>その他</li> </ol>
議事の概要	<p>◎委員の意見（概要）</p> <p>委員からは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○内容は切ないものの、主人公の94歳とはとても思えない、しっかりした柔らかくおらかな語りは引き寄せられるものがあった。</li> <li>○ラジオは「自分に話しかけてくれる」媒体であるとの思いを強くした。</li> <li>○戦後70年、重たい番組が多い中、主人公の慎ましい暮らしぶりを通して、普通の人が戦争をどのように生き抜いてきたかを上手に表現していた。</li> <li>○「恋文」という言葉はしっかりとコンセプトにマッチしていた。</li> <li>○BGMの選択や効果音も良く、ナレーションも落ち着いていた。</li> <li>○良質のラジオドラマを聞いた感じがした。</li> </ul> <p style="text-align: right;">などの評価を頂きました。</p> <p>また、気になる点や望むこととしては、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○主人公はなぜ昨年の3月から恋文を毎日書き始めたのか。</li> <li>○戦後70年の特別番組としてなぜこの企画を考えたのか。</li> <li>○戦争を知らない人々が多くなった今、放送で戦争を後世に伝える役割を果たして欲しい。</li> <li>○是非、テレビでも取り上げて欲しかった。</li> </ul> <p style="text-align: right;">などの批評や提言を頂きました。</p> <p>これらに対して、担当者から、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○主人公が昨年3月から「恋文」を書き始めたのは、それまでは毎日、窓辺に座り、空を眺めながら思いついた事や詩を書き留めていたが、突然、夫の事を思い起こすような空の日があり、それから書き始めたとのことだった。</li> <li>○戦後70年、ラジオでも何らかの企画をすべきと考えていた。既に主人公については新聞やNHKなどでも取り上げられ、ご本人も本を出版していた。そんな中、ラジオの若手営業マンからの番組化への推奨があり、トントン拍子に進んでいった。</li> <li>○「恋文」は、とてもラジオ的な言葉として伝わり、共感を得られるのではないかと思い取り上げた。</li> <li>○戦時中は同じような経験をした方が多くいらっしゃったはずなので、内容が伝わるのではないかと思い取り上げた。</li> <li>○実はテレビでも「アサデス。KBC」で取り上げた。テレビではどうしても当時の映像を多用することになり、話の内容はラジオの方が伝わるのではないかと考えた。</li> </ul> <p style="text-align: right;">などの説明をしました。</p> <p>◎放送基準第149条の条文改正（平成28年3月1日施行）について番組審議会に改正を諮問し、「改正は妥当」との答申を頂いた。</p>